

小嶋恵子先生を偲ぶ

今 井 久 登

小嶋恵子先生は、10ヶ月に及ぶ白血病との闘病生活の末、定年退職目前の2003年1月16日に永眠なさった。敬虔なクリスチャンであられた先生は心安らかに神に召されたものと信じるが、信仰薄き私は痛恨の念を禁じえない。

小嶋先生は、1957年に東京女子大学心理学科をご卒業になられた後、東京大学教育学部教育心理学研究室に事務職員として就職なさった。心理学の歴史において、1950年代から1960年代にかけては、「認知革命」と呼ばれるほどの大きな変革期であった。観察可能な行動のみをもっぱらの研究対象とする行動主義が終焉を迎え、思考や理解などの解明を目指した認知心理学が急速に台頭しつつあったのである。この認知革命の時期を、その後日本での認知心理学をリードすることになる東京大学の教育心理学研究室で過されたことは、若き日の小嶋先生にとってかけがえのない経験であったに違いない。8年間の勤務の後、小嶋先生は改めて東京大学大学院教育心理学課程に入学なさった。認知心理学者の端くれとして、私は、認知革命がまさに日々進展しつつあった時期に大学院時代を過された小嶋先生を、とても羨ましく感じるのである。

認知心理学者としての小嶋先生のご研究は、理解というキーワードを中心に展開されたと言ってよいだろう。その柱のひとつは文章の理解である。例えば私たちは、訓読みと音読みなど漢字の複数の読みの中からごく自然に適切な読みだけを選択しているが、その過程は無意識的なプロセスであるため、内省によっては知ることができない。そこで小嶋先生は、一連の優れた心理実験によってこの問題に取り組まれた。その一例を紹介しよう。小嶋先生は、実験協力者に「父兄－乳児」「父兄－金銭」などの下線部の読みの異動を判断させるという実験を工夫なさった。この着想の優れた点は、前者の読みはそれぞれ「ふ（けい）」「にゅう（じ）」と異なってはいるものの、どちらも「ちち」という同じ読み方を別に持っているという点である。これに対して後者の組はそのような読みを持っていない。このような漢字の読み判断に要する反応時間を測定したところ、別に同じ読みを持っている場合には、持っていない場合に比べて反応時間が長くなるという結果が得られた。これは、意識的には「ふけい」「にゅうじ」とだけ読んでいる場合でも、読みの選択過程では「ちち」という別の読みが活性化されているということを示している。また、反応時間のこのような違いは音読みに対しては見られなかったことから、読みの過程では音読みと訓読みとが異なった様式で処理されていることが示唆された。筆者はこの研究プロジェクトに共同研究者として参加する機会に恵まれたが、研究者としての小嶋先生を間近で見ると、その真摯な姿勢に

たいへん感銘を受け、また多くを学ばせていただいた。共同研究者としての私の力不足のために、小嶋先生のご存命中にこのプロジェクトを完遂することができなかったことが本当に悔やまれてならない。

理解をキーワードとした小嶋先生のご研究の第二の柱は、既有知識の多寡による理解の違いである。初心者と熟達者とは同じ対象に対する理解にさまざまな違いが見られることは心理学が明らかにしてきたところであるが、小嶋先生はそれをさらに推し進め、対象に対する好意や愛着によって対象の理解にどのような違いが見られるのかを調べる研究を推進なさった。この研究は学生の関心を惹きつけたようで、興味を持った学生が自分の卒論研究のテーマとして取り上げるということもしばしばであった。例えば、サッカー J リーグで人気を 2 分する鹿島アントラーズとジュビロ磐田のサポーターを対象にして、それぞれの選手を褒める文・貶す文に対する理解と印象の違いを調べるために、試合が行われる鹿島スタジアムに乗り込んで、入場を待つ両チームのサポーターに卒論の調査協力を依頼するという学生も現れた。ユニークなテーマを大胆に推し進めるという小嶋先生の研究スタイルをそのまま受け継いだ卒論研究で、小嶋先生の熱心で的確な学生指導の賜物と感心したものである。

理解をめぐる小嶋先生のご関心は、初心者と熟達者の違いから、学習支援や自己学習能力の涵養へと発展していかれた。ここにおいて、認知心理学者としての小嶋先生は、教育者としての小嶋先生の姿と重なってくるように思う。1970 年に大学院博士課程を修了された小嶋先生は、国立音楽大学に専任講師として赴任なさり、助教授（1976 年）・教授（1982 年）と昇任なさった後、1993 年に本学心理学科教授として東京女子大学に還って来られた（この間、1972 年に東京大学から教育学博士の学位を取得されている）。ご定年までの 10 年を母校のために尽くすとのことご決意で、後輩である学生の指導にとっても熱心に取り組んでくださった。特に、認知心理学を研究する大学院生や卒論生らを集めての読書会やゼミは、充実した中にも暖かい雰囲気に入れられ、同じ認知心理学分野の教員として羨ましく感じたものである。小嶋先生もそのような時間をとても楽しんでおられるご様子で、母校での研究と指導とに新たな境地を見いだされているようであった。ご定年まで残り 1 年となり、母校での総決算として最後の 1 年を過そうと張り切っていた矢先に白血病での闘病生活を余儀なくされたことは、さぞご無念であったことだろう。

最後に、私事ではあるが小嶋先生との思い出を記しておきたい。2001 年 3 月末、鳴門教育大学で発達心理学会の大会が開催された折に、小嶋先生が小学校から高校までを過された徳島県半田市のお宅にお邪魔させていただいた。優しい自然に囲まれた懐かしい雰囲気のお屋敷で、小嶋先生が過された子供時代が偲ばれたものである。小嶋先生のご遺骨が半田に眠られると聞き、あの自然に抱かれてとこしえの眠りにつかれるのかと思うと、少しでも暖かな気持ちになることができた。

小嶋先生のご活躍とご尽力とに感謝しつつ、心からご冥福をお祈り申しあげたい。